

# 日本統治時代の台湾におけるラジオ体操

井 川 充 雄

## 一 はじめに

二〇一四年三月、東京都内の二ヶ所の会場で、「アジア・アナーキー・アライアンス」と題するアートイベントが開催された。これは、台湾の中堅・若手の現代美術家を中心に十組を紹介するグループ展であるが、そこで発表された映像作品の一つに、陳擎耀（チェン・チンヤオ）の《International Radio Exercise》があった。これは、日本と台湾の町中でラジオ体操をする人々を撮影し、それを並べたものだが、両国の文化の共通性を面白さとともに描いている<sup>1</sup>。この映像作品は、日本と台湾の双方にラジオ体操が今も深く根づいていることに気づかせてくれる。

近年、ラジオ体操の社会的意味を問い直す研究が、いく

つも現れている。その嚆矢となったのは、黒田勇による「ラジオ体操と健康キャンペーン」<sup>2</sup>であろう。さらに、黒田は、その後の成果も含めて、『ラジオ体操の誕生』という単著にまとめている。この中で、黒田は、本来、ラジオ体操に託されたのは個人の健康であったが、日本全体で一つの行為に個々の身体を同調させるというラジオ体操は、ファシズムに親和的であったという<sup>3</sup>。

高橋秀実は、「なぜラジオ体操はこれほど日本人に親しまれているのか」をテーマに、『素晴らしきラジオ体操』を刊行している<sup>4</sup>。また、竹山昭子は、著書『ラジオの時代』でラジオは茶の間の主役だった<sup>5</sup>の中で、ラジオ体操に一章を割き、もともと逋信省簡易保険局の猪熊貞治や新藤誠一らによって日本に紹介されたアメリカのラジオ体操が、日

本のラジオの中に一つの番組として定着する過程を資料によって跡付けている<sup>5</sup>。このほか、ラジオ体操の音楽としての特性にも注目しながら、「モダン」や「モダニティ」を考察した竹村洋介の論文<sup>6</sup>や、ミシェル・フーコーの権力論を用いてラジオ体操を国民化の観点から分析した山下大厚の論文<sup>7</sup>などがある。

しかし、黒田は若干の言及をしているものの、これらの「ラジオ体操」研究は、外地におけるラジオ体操にほとんど言及していない。他方、近年になって、植民地研究の中からラジオ体操に触れた研究がいくつか現れている。たとえば、権学俊は、植民地下の朝鮮において、ラジオ体操が、「健民運動」として日常生活の規律化に大きく関わっていたことを明らかにした<sup>8</sup>。また、代珂は、「満州国」とその前身の「関東州」において、ラジオ体操が導入され、それが「満州国」独自の「建国体操」になっていく過程を、従属・服従を示すための儀礼的機能として分析している<sup>9</sup>。このほか、植民地における体育史研究としては、入江克己や西野達雄の一連の著作がある<sup>10</sup>。

周知の通り、日本におけるラジオ放送は、一九二五（大正一四）年に試験放送を行った社団法人東京放送局に始まる。それが翌二六年八月二〇日には、続いて設立された大

阪放送局、名古屋放送局と統合し、日本放送協会となる。その設立間もない日本放送協会が、最初に直面した国家的イベントが、大正天皇の崩御と昭和天皇の即位であった。そのため、一九二八（昭和三）年一月のご大札（昭和天皇即位の式典）に向けて、放送協会は全国放送網の建設を進めていった。

そうしたなか、一九二七年の夏頃、逓信省簡易保険局が、アメリカのメトロポリタン生命保険会社が始めたラジオ体操をモデルとして、日本でもラジオを通じて体操を指導する「保健体操の放送」を放送協会に働きかけた。これが、大札記念事業の一つとして一九二八年一月一日、東京放送局でスタートした「ラヂオ体操」となる<sup>11</sup>。つまり、日本におけるラジオ体操は、その発足から天皇制と深い関わりがあった。なお、開始当初の正式名称は「国民保健体操」であったが、その後、今日まで「ラジオ体操」の名称が定着しており、本稿でも「ラジオ体操」で統一することにす。一九三二年には、ラジオ体操第二（ただし、現在、一般に行われているラジオ体操第一・第二とは、体操の内容も音楽も異なっている。現在のラジオ体操第一は一九五一年、第二は一九五二年に制定されたものである。）の放送も始まる。

そして、ラジオ体操を見る上で重要なのは、それが個人の運動であるばかりでなく、「ラジオ体操の会」として集団化していったことであろう。元々は職場や学校等、集団といっても小規模にすぎなかった。ところが、一九三〇年七月、東京・神田万世橋署の児童係巡查の面高叶の呼びかけで、子どもたちが集団でラジオ体操を行った<sup>12</sup>。翌年には、東京中で夏休みラジオ体操の会が開かれ、各小学校の三―四会場に集まった人たちは延べ三五〇万人を数えた<sup>13</sup>。一九三二年夏には、ラジオ体操の会は全国に広がった。この後、ラジオ体操の会は毎年、規模が拡大し、本稿が対象とする台湾やその他の外地でも実施された。

こうした集団化の過程は、多くの人々の身体を一律に動かすことを可能とするというラジオの放送の特性をよく示している。そして、ラジオ体操の集団化は、「国民化」さらには「皇民化」を進展し、国民の身体や精神を「総動員」するものであったといえる。

## 二 台湾におけるラジオ体操の開始

台湾におけるラジオ放送は、日本と同様に、一九二五年に始まった。すなわち、この年の六月一七日に開会した始政三十年記念展覧会の第三会場において台湾総督府交通部

通信部が一〇日間にわたって実験放送を行ったのである。その後、一九二八年一月二二日になって、台北放送局が開局し、試験放送を開始した。当初は、通信部が運営した。台北放送局が本放送を開始するのは、一九三一年一月一五日になってからであるが、翌二月一日には、社団法人台湾放送協会が設立され、台北放送局は台湾総督府から移管される。一九三二年四月一日には台南放送局が、一九三五年五月一日には台中放送局が開局した。なお、一九四二年一月一〇日から二重放送を開始するまでは、すべての放送は日本語で行われた。そのため、日本語教育が行われていたとはいえ、加入者は圧倒的に日本人が多かった<sup>14</sup>。

日本の植民地下の朝鮮では、一九二六年に社団法人京城放送局が設立され、翌二七年二月一六日に放送を開始した。また、日本の租借地となっていた中国・大連では一九二五（大正一四）年八月、関東庁通信局が実験放送を行った。一九三三年に「満州国」が建国されると、同年九月一日に満州電信電話株式会社（満電）が設立され、首都の新京（長春）に置かれた新京放送局や、それまでの大連放送局などをその下に置いた<sup>15</sup>。

こうして「帝国」の版図の拡大とともに、ラジオ網も建設されていった。そして、それとともに、ラジオ体操も拡

大していったのである。ラジオ体操の放送開始一〇周年を記念して、日本放送協会は、ラジオ体操に関する感想文を全国から募集した。それは『ラヂオ体操感想文集 ラヂオ体操放送開始十周年記念』<sup>16</sup>としてまとめられている。この中には、台湾から送られたものは収録されていないが、寄せられた二百通あまりの感想文のうち一通は朝鮮から、二通は満州からのものであった。

さらに言えば、一九四一年一月八日の太平洋戦争開戦と同時に、日本軍はタイ王国領土に進軍を開始し、二月二一日に日泰攻守同盟条約を締結した。それに先立つ六月に、放送局設置が発表される。

#### 占領地に放送局設置とラヂオ体操

タイ放送局報によると、佛印より割譲される地域確定後バツタンバンに放送局を設立すべく、尚該局は安南語及カンボチャ語の放送を行い、之加公式発表によれば、放送局はタイ国民体位向上の為、体育局と協力してラヂオによる朝の体育訓練を指導する筈。尚本計画開始前宣伝局は社会各方面の意見を集めて善処すると云われている<sup>17</sup>。

このように、ラジオ体操の実施が放送局の設置とともに発表されるほど、ラジオ体操が重視されていたとみることができよう。

また、雑誌『放送研究』には、中国戦線の最前線で、ラジオから聞こえてきたラジオ体操の音楽に励まされたとの記者のレポートもある<sup>18</sup>。竹村が指摘しているように、ラジオ体操は音楽番組でもある。そうした特性を如実に示す記述といえよう。

さて、台湾におけるラジオ体操だが、台湾で発行されていた『台湾日日新報』のラジオ欄を繰っていくと、通信時代の台北放送局によって、一九三〇年四月一日に開始されたことがわかる。当時、一日の放送は、午前一〇時三〇分から夜の一〇時までで、この日から、午後〇時四〇分からと午後六時五〇分からの一日二回、ラジオ体操が放送されるようになった。初日の四月一日には、放送に先立って〇時三〇分から特別講演「ラヂオ体操開始に際して」が放送された。講演者は、本多庫吉とある。台湾総督府職員録によれば、この人物は、当時、貯蓄貯金課書記であった<sup>19</sup>。また、四月一日から五日までは、夕方の放送の前の六時二十五分から、台北高等商業学校助教の今井壽男による「ラジオ体操の要領」も放送されている<sup>20</sup>。番組改定直前の三

月二九日は、以下の予告記事も掲載されている。

中継放送は今月限り ラヂオ体操其他新しい試み

内地の中継によってだいぶ賑わった台北放送局も追々空雷期に入るので例によって内地中継は本月限りとし四月一日より全部地元放送を行うこととなった、而して新しい試みとしてラヂオ体操を毎日午後零時四十分より午後六時五十分よりの二回各十分間及び台北市基隆市の職業紹介（求人求職）を毎週月曜日午後九時二十分ニュースの時間に放送することとなった<sup>21</sup>。

空雷とは、雨が降らないにもかかわらず雷が発生する大気が不安定な状態のことである。この状態になると、当時の技術では内地からの電波が困難であった。そのため、内地からの中継に依存できなくなった台北放送局が始めたのがラヂオ体操であったということである。

日本放送協会のラヂオ体操は、元軍人のアナウンサー・江木理一が掛け声をかけたが、内地からの中継に依存できなくなった台北放送局は、今井壽男ら数人の教員が交代で講師を務めた<sup>22</sup>。

こうして台湾におけるラヂオ体操は、日本からほぼ一年

半遅れてスタートすることとなった。ただ、当時の『台湾日日新報』の記事を見ると、それは唐突に始まったのではなかった。その前年の一九二九年九月二九日には、次のような記事がある。

#### ラヂオ体操

毎朝新公園に於ける国民体操にて心身を練っている修養会では内地に流行しつつあるラヂオ体操を二十九日に朝台湾に於ける第一回として催すことになった<sup>23</sup>。

文中の「国民体操」とは、国民体操研究所長の松元稲穂が考案した、一日五分の体操で呼吸器と消化器を強健にするというもので、ヨイサヨイサの掛け声とともに行われた<sup>24</sup>。台湾においても、たとえば『高雄時報』八号に、その効用等が紹介されており<sup>25</sup>、ある程度実践されていたものと思われる。松元は、ラヂオ体操（国民保健体操）の考案にも関わっている<sup>26</sup>。

この松元の「国民体操」と深く関係していたのが、修養団という団体である。これは、一九〇六（明治三九）年二月一日に蓮沼門三らによって設立され、現存する社会教育団体である。設立直後は、東京市長などを歴任した田尻

稲次郎や、枢密院議長や首相を務めた平沼騏一郎らが団長を務めた。「流汗鍛錬」と「同胞相愛」の二つをモットーに、自己の精神と身体の鍛錬による社会改善を目的とし、鍛錬のための野外活動などを実践した。蓮沼自身は、この修養団の活動を「白色倫理運動」と考えていた<sup>27</sup>。彼にとつては、大正デモクラシー期の民主主義、さらには社会主義や無政府主義の浸透によって分断の進む日本社会を、精神と身体を鍛錬して倫理を立て直すことによって、改善しようと考えたのであるが、次第に皇国民育成のための国民教化の色彩を強めていった<sup>28</sup>。そして、「流汗鍛錬」のために取り入れられたのが、松元の「国民体操」であった<sup>29</sup>。

一九二五年一月には、台湾教育会の招聘により、修養団主幹の蓮沼や顧問となっていた松元らが台湾を訪問した。このときには一月二三日から二五日までの三日間にわたり、全島小公学校長講習会を開催し、校長らを対象に、合宿して「修養」を実践した<sup>30</sup>。そして、一九二八年二月一日には、修養会台北支部が発会する<sup>31</sup>。これが、先の引用文中の「修養会」であろう。

つまり、修養会にとっては、早起きをして体を動かすことは、たんに健康を維持・増進するためのものではなかった。早朝に集合し身体を鍛錬することが、精神の修養でも

あると考えられていたのである。こうした修養会による早朝の体操実践を直接の前身として、台湾のラジオ体操は始まったのである。

さて、先述のように、台湾におけるラジオ体操は、当初一〇時三〇分からであったが、台湾放送協会の放送の拡充とともに放送時間が早まっていった。内地では、おおむね朝七時からラジオ体操が放送されていたが、台湾では季節によって放送時間が変化した。すなわち、四月から九月（年によつては一〇月）までは平日・休日ともに六時放送開始で、一〇月（または十一月）から三月は六時三〇分放送開始であった。いずれも最初の三〇分間に「朝の挨拶・ラヂオ体操・今日のお天気」が放送された。また、一九三七年には、学校の夏休みになる七月一日から八月三十一日まで、時間がさらに早まり午前五時三〇分開始となっている<sup>32</sup>。

また、一九三七年一〇月一日から、内地と台湾の時差が撤廃され、台湾の標準時を日本の標準時に合わせる措置がとられた。すなわち、台湾時間は一時間早められたのであるが、このとき、放送開始は午前七時となり、内地に合わせる<sup>33</sup>。しかし、一九三八年六月から、再び放送開始は六時三〇分に早められている<sup>34</sup>。また、この年の五月か

らは、以下のように午後にもラジオ体操が放送されるようになる。

### 五月二日より午後もラジオ体操

躍る朝日の光を浴びて、一家揃って毎朝のラヂオ体操はその日一日をいかに爽快にすることでありましよう！

然しそれだけで満足ということは云えません。時は国家の非常時、国民精神総動員と共に国民の体位の向上はゆるがせに出来ぬ時であります。この機会に一日のうちにも最も精神も体も疲労を覚え、活を入れなければならぬ午後、もう一度揃ってラヂオ体操をしようではありませんか<sup>35</sup>。

なお、日本国内でも、一九三九年四月一日より、「国民保健の徹底を期して」毎日午後二時四〇分から二〇分間ラヂオ体操の時間が増設された<sup>36</sup>。ラジオ体操を一日に何度も行うことによって心身を鍛え、健康を維持することが国家のためになるという「健康報国」の考えがそこにあった。

### 三 ラジオ体操の集団化

台湾におけるラジオ体操が、日本国内と同様に集団化していくのにそれほどの時間は必要としなかった。すなわち、一九三三（昭和八）年八月一日からの六日間、総督府文教局、交通局通信部、台北市、台湾放送協会の共同主催、台湾日日新報社、各青年団、生命保険協会等の後援の下に、毎日午前六時から三〇分間、台北市新公園内の広場で行われた。三〇分間というのは、まず第一体操をやった後、さらに第一、第二、第一、第二を続けて、計五回も体操を行ったからである。この初めてのラジオ体操の会は、一日最高六五〇〇人、参加延べ人員が三万一五〇〇人に達したという<sup>37</sup>。

翌三四年の夏には、全島に拡大され、総督府文教局、交通局通信部、台湾放送協会の共催で、島内の学校、公園、広場等の四三三カ所を使って、「第一回全島ラヂオ体操の会」が開催されるようになる。一〇日間に約二〇〇万人が参加した<sup>38</sup>。「全台湾ラジオ体操の会」は、一九四四年には戦局が悪化して中止となるが、それまでの参加者数等は表1の通りである。残念ながら、現時点では一九四〇年度以降の参加人数等はわからなかった。ただし、年によって会

表1 台湾における「ラジオ体操の会」の開催状況

名 称	年度	会場数	参加延べ人数
台北ラジオ体操の会	1933	1	31,500
第一回全台湾ラヂオ体操の会	1934	432	約200万人
第二回全台湾ラヂオ体操の会	1935	463	
第三回全台湾ラヂオ体操の会	1936	482	1,341,403
第四回全台湾ラヂオ体操の会	1937	710	1,707,685
第五回全台湾ラヂオ体操の会	1938	1,519	3,181,000
第六回全台湾ラヂオ体操の会	1939	1,768	3,785,298
第七回全台湾ラジオ体操の会	1940		
第八回全台湾ラジオ体操の会	1941		
第九回全台湾ラジオ体操の会	1942		
第十回全台湾ラジオ体操の会	1943		

(出典) 台湾放送協会発行『ラヂオタイムス』、日本放送協会発行『ラヂオ年鑑』『放送』『放送文化』の記事等から作成。

期が違うので、参加延べ人数は単純には比較することはできない。一九四三年には八月一日から三十一日まで一ヶ月にわたって行われた<sup>39</sup>。ラジオ体操の会は、例えば、一九三六年の場合、次のような順序で行われた。

ラヂオ体操の会 一九三六年、八月一日より一九日  
まで一〇日間開く。

実施順序は午前五時五十分よりレコードを放送して先ず準備を行い、六時朝の挨拶、国旗掲揚国歌斉唱、皇居遙拝をなしつついて体操が開始され、終了後万歳の三唱、参加者一同拍手、レコード放送裡に解散となります<sup>40</sup>。

ここで、一九三七年の「第四回全台湾ラヂオ体操の会」での、文教局長の島田昌勢の挨拶を見てみよう。全文を掲載する紙幅はないが、要点は以下の三点に集約できる。すなわち、第一は、「健康でありたいと云うこと程、我々にとって一般的な願いはないのであります、これなくして、我々は到底完全なる公私の生活を営むことが出来ないであります」。第二は「近来になりました、一般社会の人々、特に都市に居住する人々の地理的環境、生活条件等は保健衛生の立場から申しますならば、漸次、悪化の傾向を通りまして、茲に一つの社会問題をさえ生ずるに至つて」おり、「ラヂオ体操は実に、かかる問題解決の一段とも見られるべきものであります、その運動動作の簡単容易なる点、広く一般の参加に応じられる点、等より見ます

ると、誠に適切、有効なるものであります」。そして第三には「さらにこれを一つの国民的行事として見ます時は、我々は更に一層根本的であり、又大切な意義を認めるのであります。即ち、早朝、黎明の中に於て、老幼男女相集い、清明なる気分の中に、皇居遙拝、国旗掲揚等の国民的行事を行うことは、国民精神を涵養、振作する上に誠に大切なものであります。国民的行事に参加することによりまして得られるべき共通の感情、共通の体験が、国民的自覚の基礎と考えられますならば、我々がこのラヂオ体操の会に於ける行事により獲得するものこそ、我々の国民的自覚を深めるものでありまして、本島に於ては、特にこの種の行事は意義を持つものと云うべきであります<sup>41</sup>。つまり、第一はラヂオ体操の目的は個人の健康にあるとするが、第二には環境の改善という社会的目的が加わり、第三にはそろってラヂオ体操することが国民精神を涵養し、国民的自覚を深めるものだとしているのである。この背景には、もちろん、当時の日本やその植民地が「非常時」にあり、「思想善導」が必要であると統治者が考えていたことがあった。それを、同じ年の「閉会の辞」で通信部長の戸水昇は、より端的に述べている。

去る八月一日から二〇日間に亘、全国的に「良心鍛錬運動」が開始され、非常時日本の国民総動員の良心鍛錬をはかるべく挙行されているが、その目的を達する一にラヂオ体操が挙げられている。斯る際に老幼男女挙つて、心身の健康をはかる義務が茲にもあるものと思ふ<sup>42</sup>。

この一九三七年には、日本政府が、八月一日から同二〇日まで国民心身鍛錬運動を国家総動員で展開した。その骨子は、「ラヂオ体操の普及奨励」（一般国民特に都市生活者）、「戸外運動の指導奨励」（主として都市生活者）、「夏期休暇を利用する心身鍛錬（主として学生生徒児童）」<sup>43</sup>の三点であり、ラヂオ体操がこの運動の一環に位置づけられていることを戸水は述べているのである。

さらに、太平洋戦争が勃発した後になると、これは極限まで拡大する。一九四三年に、台湾南西部の土庫（現在の雲林県土庫鎮）の街への昇格を取材した記者は、以下のよう記している。

ここのラヂオ体操の徹底振りにはまことに奇蹟に近い。街の者全部残りなく参加だ。おそらく全島何処に行っ

てもこのようなところは黴いであろう。

ラヂオ体操の町「土庫」は、ラヂオ体操で更正した町であろう。土庫はトコで寢床に通じ、昔はきつと相당한朝の遅い町であったに相違ないが、これではならぬとラヂオ体操で早起き励行―まことに微笑ましい風景である<sup>44</sup>。

統治する側にたつ日本人記者の目には、本島人がこぞって早起きし、ラヂオ体操に「参加」をしている光景は「微笑まし」く映ったであろうが、その背後には厳しい「動員」があったのではないだろうか。

#### 四 おわりに

こうして、台湾におけるラヂオ体操の導入過程をたどってみると、ほぼ日本のそれと類似しているのがわかる。つまり、そもそもは個人の健康を目的としてスタートしたラヂオ体操が、「非常時」における総動員の結果、「健康報 国」イデオロギーに取り込まれていったのだと言える。しかし、修養団における国民体操のように、精神修養と結びついた集団的な体操の実践がラヂオ体操に先行して存在したことが見逃されるべきではない。それが、ラヂオ体操の

集団化の素地となったと考えるべきであろう。

そして、曲がりなりにも「大正デモクラシー」の時期を経験した日本国内に対し、そうした時期のなかった植民地・台湾では、ラヂオ体操が、修養会に代表されるような社会教化運動と親和的なものとして、ダイレクトに集団化していった。そして、それは、ラヂオ放送の直接の聴取者であった日本人や一部の日本語を解する台湾人だけでなく、日本語を解さない「本島人」のラヂオ体操の会への参加・動員を急速に促していった。それによって「内国人」と「本島人」の区別なく、「日本人」としての国民精神を涵養し、国民的自覚を深めるものとして、より切実に意識され、期待されたのだろう。

本稿では、その背後にある総督府の社会政策やメディア政策には十分触れることができなかった。また、朝鮮や「満州」などほかの植民地と比較することで、台湾の固有性をさらに浮き上がらせることができると思われる、これらは今後の課題としたい。

#### 【注】

1 この作品は、二〇一五年二月現在、YouTube 上でも閲覧できる。

<https://www.youtube.com/watch?v=Pe6F-Se9jg>

[https://www.youtube.com/watch?v=Hem\\_Snslog](https://www.youtube.com/watch?v=Hem_Snslog)

<https://www.youtube.com/watch?v=012jHhQXc>

また、「アジア・アナキー・アライアンス」については、「毎日新聞」二〇一四年四月九日付けに、批評記事が掲載されている。

2 黒田勇「ラジオ体操と健康キャンペーン」津金澤聡廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館、一九九六年。

3 黒田勇「ラジオ体操の誕生」青弓社、一九九九年。

4 高橋秀実「素晴らしきラジオ体操」小学館、一九九八年。(二〇一三年、草思社文庫から再刊。)

5 竹山昭子「ラジオの時代 ラジオは茶の間の主役だった」世界思想社、二〇〇二年。

6 竹村洋介「身体・リズム・メディア ラジオ体操ができた頃を中心に」『ソシオロジスト 武蔵社会学論集』二(一)、武蔵社会学会、二〇〇〇年。

7 山下大厚「国民化とラジオ体操 国家の身体とわたしの身体」『法政大学大学院紀要』四四号、法政大学大学院、二〇〇〇年。

8 権学俊「戦時下植民地朝鮮における身体管理と規律化に関する一考察」有賀郁敏・山下高行編著『現代スポーツ論の射程 歴史・理論・科学』文理閣、二〇一一年。

9 代珂「関東州」及び「満洲国」におけるラジオ体操の儀式的機能—『人文学報』一九三三号、首都大学東京人文学研究科、二〇一四年。

10 入江克己「日本近代における植民地体育政策の研究」(第1報)

第6報)『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』三五(二)〜三八(二)、鳥取大学教育学部、一九九三〜一九九六年。西尾達雄「日

本植民地下朝鮮における学校体育政策」明石書店、二〇〇三年。同

「植民地と身体」に関わる研究動向『植民地教育史研究年報』一六号、皓星社、二〇一三年。

11 ただし、黒田も指摘するように、二八年八月の一ヶ月間、大阪局でもラヂオによる体操番組が放送されており、これを「ラジオ体操」の起源ということもできる。黒田前掲書、一一〜一二ページ。

12 面高叶「ラジオ体操の会を創った頃」『放送』一一(六)、日本放送協会、一九四一年七月、一一一ページ。

13 日本放送協会編『二〇世紀放送史』上、日本放送出版協会、二〇〇一年、五八ページ。

14 放送文化研究所二〇世紀放送史編集室『台湾放送協会』一九九八年。および日本放送協会編『ラヂオ年鑑』の各年版を参照した。

15 「電電の十年」満州電信電話株式会社、一九四三年(波形昭一、木村健二・須永徳武監修「社史で見る日本経済史 植民地編」第三卷、ゆまに書房、二〇〇四年)。山本武利「満洲における日本の

ラジオ戦略」[Intelligence] 四号、二〇〇四年、早稲田大学二〇世紀メディア研究所。および朴順愛「植民地朝鮮におけるラジオの役割」[Intelligence] 四号、二〇〇四年、早稲田大学二〇世紀メディア研究所。

16 「ラヂオ体操感想文集 ラヂオ体操放送開始十周年記念」日本放送協会、一九三九年。

- 17 田中武編「泰国重要問題摘要 昭和十六年編」日泰学院調査部、一九四二年、二二ページ。なお、「バツタンバン」(バタンバン)は、かつてタイの領土に編入され商業都市として発展したが、一九〇九年にカンボジア領となった。一九四一年五月九日のタイとフランス(ヴィシー政権)が日本の仲介で締結した条約により、再びタイが領有することとなった。第二次世界大戦後の一九五三年にカンボジア領となった。
- 18 久保雄二郎「ラジオと戦線(下)ラジオ体操」『放送研究』一(三)、日本放送協会、一九四一年二月、八二〜八四ページ。
- 19 中央研究院台湾史研究所台湾総督府職員録系統 (<http://who.ith.sinica.edu.tw/impView.action>) による。
- 20 『台湾日日新報』一九三〇年四月一日〜五日。
- 21 『台湾日日新報』一九三〇年三月二十九日。
- 22 『台湾日日新報』一九三二年四月一日。
- 23 『台湾日日新報』一九二九年九月二十九日。
- 24 松元稲穂『国民体操 健康読本』彩雲堂、一九二六年。
- 25 鈴木寛『国民体操に就て』『高雄時報』八号、発行年月は明記されていなが、一九二七年と思われる。
- 26 黒田前掲書、三六ページ、七一ページ。
- 27 連沼門三「白色倫理運動と明魂の発揮」大久保周八編『現代名演説集 一九二八』大日本雄弁会講談社、一九二八年。
- 28 連沼や修養団については、網沢満昭「連沼門三について」『近畿大学教養部紀要』二九(二)、(近畿大学教養部、一九九七年一二月)、新藤雄介「大正期における雑誌『向上』と修養団の広がり 巡回講演と青年団の関連において」(『メディア史研究』三四号、二〇一三年)などを参照。
- 29 佐々木浩雄「国民体操」の普及とその特質——大正期における修養団運動および協同会第一回労務者講習会(一九二一)での実践を中心に——『体育史研究』二三号、日本体育学会体育史専門分科会、二〇〇六年三月。
- 30 『台湾日日新報』一九二五年一月二三日、二五日、二六日。名越生「修養団に就て」『台湾鉄道』一六五号、一九二五年三月。同「修養団講習会に就て」『台湾鉄道』一六六号、一九二五年四月。
- 31 『台湾日日新報』一九二八年一月五日。
- 32 『ラヂオタイムス』五五号、一九三七年七月五日。
- 33 『ラヂオタイムス』五八号、一九三七年一月五日。
- 34 『ラヂオタイムス』六六号、一九三八年六月五日。
- 35 『ラヂオタイムス』六五号、一九三八年五月五日。
- 36 日本放送協会編『ラヂオ年鑑 昭和一五年版』一九四〇年、七ページ。
- 37 『台湾日日新報』一九三三年八月二日。日本放送協会編『ラヂオ年鑑 昭和九年版』一九三四年、四二八ページ。放送文化研究所二〇世紀放送史編集室『台湾放送協会』一九九八年、三四ページ。ただし、上松英夫「第一回台北ラヂオ体操の会」(『台湾通信協会雑誌』一四〇号、一九三三年九月一七日)には、六日間の参加者の合計は二万八五〇〇人と記されている。

38 『台湾日日新報』一九三四年七月一三日、八月二三日。

39 『台湾日日新報』一九四三年八月一九日。

40 『ラヂオタイムス』四四号、一九三六年八月五日。

41 『ラヂオタイムス』五七号、一九三七年九月五日。

42 『ラヂオタイムス』五七号、一九三七年九月五日。

43 「国民体力とは何か」『社会事業の友』一〇五号、一九三七年八月一日、一一七ページ。

43 杉崎記者「黎明の街『土庫』」『台湾地方行政』九号、一九四三年九月一〇日、一〇六ページ。

なお、原則として、繁体字や旧字は新字に、旧仮名づかいは新仮名遣いに修正した。また、旧来の「ラヂオ」という表記は、一九四一年四月に「ラジオ」と改められた。(ただし、その前後でも両方の表記は併存している。)これについては本稿では、原文のままとした。

付記

筆者は、立教大学派遣研究員の制度により、二〇一四年一月二七日から二月二六日まで、台湾の天主教輔仁大学に滞在し、研究をする機会を得た。本稿は、その成果の一部である。

(立教大学社会学部教授)